

【 61 】

氏 名	青 山 宏 あお やま ひろし
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	医 博 第 115 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 6 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専 攻	医 学 研 究 科 病 理 系 専 攻
学位論文題目	耐性及び感受性結核菌に依る Koch 現象の病理組織学的研究

論文調査委員 (主 査) 教授 鈴 江 懐 教授 岡本耕造 教授 田部井 和

論 文 内 容 の 要 旨

R. Koch が 1891年に Koch 現象を報告し、1906年に Von Pirquet がアレルギーなる概念を提唱して以来諸学者によりこの現象と免疫をめぐる数多くの研索が続けられているにもかかわらず、未だ究明の域に達したとは言えない実状である。この Koch 現象はまたアレルギー現象の一典型であるとも言えるが、Koch の行なったものは単一の結核菌についてのみであった。その後幾種類もの結核菌が出現し、さらに近年種々抗結核剤の出現に応じて、これ等に抵抗性を獲得した耐性菌の出現が問題となり、これ等の混在による感染とアレルギー関係もさらにいっそう複雑多岐になっていると考えられる。そこで著者は耐性菌をも混えた4種の菌、すなわち人型結核菌 H-37 Rv 株とその SM 100r 耐性菌、ならびに青山-B株とその INAH 100r 耐性菌を用い、それぞれの感染と再感染の交叉による Koch 現象について再検討を試み次のような所見を得た。

- 1) H-37 Rv 原株およびその SM 耐性菌のマウス静脈内感染による像は SM 耐性菌の毒力低下を示すような所見は見られなかった。
- 2) 供用の4種の菌についてモルモットで行なわれた交叉再感染による Koch 現象の像に関しては大体次のごとく要約できる。すなわち初感染と再感染の菌が同じ場合ならびに異なる場合における組織像には本質的な差はない。しかし再感染が初感染と異なる菌で行なわれた場合はその反応がやや緩徐に進行しているような像が認められた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

近年における医界に現われた、もっとも驚異的な進歩発達の一つは抗生物質の研究であることは、衆目の一致するところであろう。ところが、いろいろ強力な抗生物質の出現によって、多くの伝染性疾患がもっとも容易に治癒せしめられることとなった反面、菌交替症、耐性菌の増加など、またいろいろ困難な問題が起こってきた。著者の研究は、これら耐性菌のなかでも、もっと重要な意義をもつものといわなければ

ばならぬ結核菌のそれについての研究である。

だいたい耐性菌なるものについては多くの細菌免疫学的ないし臨床的報告がなされているが、病理解剖学的ないし病理組織学的研究はきわめて少ない。ところが、さきに鈴江教室の川村がブドウ球菌感染症について、原株菌と耐性菌とではその病像に顕著な差異のあることを見出した。そうしてそれは、あたかも Koch が古く結核菌で発見した重感染と初感染との像にほうふつたところのものがあるのであった。そこで著者は、この古典的命題をなす、いわゆる Koch 氏現象そのものが、多くの耐性結核菌が現われている今日、それがやはりそのままの姿で通用するか、またはなんらかの修正がなされるべきであるかなどを探求すべく、本研究をこころみたのである。

その成績は多岐にわたっているが、要するに結核原菌と耐性菌とをいろいろ組み合わせ、モルモットを試験動物として実験をこころみた結果、Koch の初感染再感染に類する病像が、感受性菌と耐性菌とを交叉感染させることによって、ある程度明瞭に認められたのであった。

以上は結核菌の感染病理に関し、いまだ知られていない新しい領域を開いたものであり学術的に有益なものである。したがって本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。